

韓国語の「-n kes-ita」文について —「主題－解説」構造の観点から—

李 英蘭

要旨

本研究は、韓国語の文末表現である-n kes-ita 文について、「主題－解説」構造の観点から-n kes-ita の基本的な働きと諸特徴を明らかにすることを目的とする。

本来、-n kes-ita は、形式名詞の kes に指定詞の ita が接続したもので、名詞文をなしている。この場合、文は「X は Y だ」という構文をとり、典型的な「主題－解説」構造を有している。が、-n kes-ita には、名詞文として機能していないものがあり、従来の研究では、この種の-n kes-ita を「説明のモダリティ」表現とみなしてきた（便宜上、前者を kes-ita I、後者を kes-ita II と呼ぶ）。しかし、これらの考察では、kes-ita II の意味についてまだ十分に説明されていない部分が多く、また、kes-ita I と kes-ita II の間に意味・機能においての関連が見られないという問題がある。

そこで、本稿では、「主題－解説」という概念を通じ、kes-ita I と kes-ita II は、両方とも「主題－解説」構造をもっていることを明らかにし、kes-ita I の機能は統語的に名詞文をなすのに対し、kes-ita II の働きは表現形式に名詞文の形をとることで、「主題－解説」構造の中で、前提となる「主題」を要求するマーカーであることを主張する。

キーワード： -n kes-ita, 名詞文, 主題－解説, 判断文, 思考プロセス

1. 問題提起および研究目的

現代韓国語の文末に現れる-n kes-ita 文（以下、kes-ita と表記）は、述語を名詞化する形式名詞である kes に、指定詞の ita が後接したものである。本来、kes 以外の名詞化辞である-ki や-(u)m などに指定詞がついた-ki-ta¹や-(u)m-ita は文末に現れにくいだが、kes は kes-ita の形で文末に現れ、名詞文をなしている。が、kes-ita 文には名詞文として働いておらず、別の意味をもっているものがある。例えば、kes-ita が用いられた次の例文 (1) と (2) では、kes-ita の働きが異なる。

- (1) 이 책은 아버지가 읽은 것이다.²
i chayk-un apeci-ka ilkun kes-ita.

この 本は 父が 読む[過去] kes-ita

(この本はお父さんが読んだものだ。)

【Yang 2005】

(2) 아버지가 돌아오신 것이다.

apeci-ka tolaosin kes-ita.

お父さんが 帰ってくる[過去] kes-ita

(お父さんが帰ってきたのだ。)

【Sin 1993】

例文 (1) の kes は、「本」を指しており、「この本はお父さんが読んだ本だ」のように kes を「本」という具体的な語彙に置き換えることができるという点で名詞として働いている。そのため、文全体は「XはYだ」という統語構造をもち、名詞文をなしている。

それに対し、例文 (2) は、kes を具体的な語彙に置き換えた「?お父さんが帰ってきた何かだ」のような解釈もできなければ、名詞化接辞である ki や(u)m を用いて先行する述語を名詞化した「?お父さんが帰ってきたことだ」のような解釈も不可能である³。このように (2) の kes-ita 文は、kes が名詞として働いていないため、名詞文をなしていると考えがたい。

従来の研究では、前者を kes-ita I と、後者を kes-ita II と呼び、両者の違いはその統合構造にあり、kes-ita II の意味は kes-ita I から再構造化が起きた結果であると指摘している (Sin 1993, Kim 1994, Yang 2005 等)。つまり、kes-ita I の場合、kes と ita は、それぞれ本来の意味をもち別々に機能しているため、統語的に「kes+ita」と分けることができるのに対し、kes-ita II は、kes と ita がその本来の意味をもっていないため、「kes+ita」と分けることができず、ひとかたまりの kes-ita と一語化された⁴ということになる。

このような統語構造の違いによる kes-ita I と kes-ita II という分け方は、kes-ita の意味を考察するにあたって、kes-ita 文が、名詞文であるか否かによって二つに分けられるという本稿の立場と一致するところがある。そのため、以降、本稿では、必要に応じて「kes+ita」に分けられ名詞文として働いているものを kes-ita I、そうでないものを kes-ita II と呼ぶ。また、kes-ita 全般について言及するときや、文末表現の標示として用いられるときは、kes-ita と表記する。

ここで一つ、kes-ita に関する先行研究を検討し、諸問題点を探る。kes-ita に関する先行研究は大きく、①kes-ita の再構造化に関するもの、②kes-ita II の意味に関するもの、③kes-ita の意味を全体的に考察したもの、との三つに分けることができる。

まず、kes-ita の再構造化に関する研究 (Sin 1993, Kim 1994, Yang 2005 等) は、統語構造の異なる kes-ita I と kes-ita II の存在が確認できたことと、その原因を kes-ita の再構造化の観点から見つけ出そうと試みたことは有意義だが、kes-ita II の意味を当該事態の「強調」、「断定」、「確認」などにとどめ、その意味の詳細については殆ど触れていない。

次に、kes-ita II の意味に関する先行研究 (李 2001, 印 2006, 幸松 2006 等) は、主に

日本語のモダリティ表現であるノダ文との比較を行ったものが大半で、kes-ita II はノダと同様、「説明のモダリティ」表現であり、前後の文を結びつけ、それについて様々な内容（結果や理由、事情など）を説明していると述べている。これらの研究では、ノダの意味・用法が kes-ita II とどのように対応しているかを考察し、ノダと kes-ita II には、使用頻度や使用条件に差があると指摘している。しかし、kes-ita II はノダ以外にモノダ、コトダ、ワケダなど日本語の様々なモダリティ表現とも対応しており、一概に「説明のモダリティ」と言ってもノダと kes-ita II の「説明」のしくみが同じだとは限らない。

最後に、kes-ita 全般について考察した先行研究に李 (2009) がある。李 (2009) では、kes-ita の意味を「指示」、「名詞化」、「関連づけ」との三つに分け、kes の指示性の消失によって「指示」から「名詞化」へと、さらに語用論的強化によって「関連づけ」へと変化したと指摘している。また、「関連づけ」を「話し手がある出来事を認識し、それに対して何らかの関係のある出来事を導き出す話し手の推論 (李 2009:35)」と定義し、kes-ita は、「言い換え」や「結果」、「原因・理由」などとして関連づけられると述べている。李 (2009) は、kes-ita が kes の意味変化によって kes-ita I から kes-ita II へ拡張してきたことを明らかにし、kes-ita の意味を全体的に示したことに意義はあるが、「名詞化」と「関連づけ」の特徴においては、同じ形式から発達したと考えがたいほど両方の間に関連が少くない。これは、李 (2009) だけではなく、kes-ita II の意味に関する先行研究は、殆どそうである。

その他、先行研究全般において、次の (3) と (4) のような kes-ita II の文についての説明が不十分であるという問題点もある。

- (3) 오늘 타로는 결석했다. 감기에 걸린 것이다.
 onul thalo-nun kyelsekhayssta. kamki-ey kelling kes-ita.
 今日 太郎は 欠席する[過去] 風邪に かかる[過去] kes-ita
 (今日、太郎は欠席した。風邪をひいたのだ。)
- (4) 어제 영화관에 갔는데 타로가 있는 거야.
 ecey yenghwakwan-ey kassnunthey thalo-ka issnun ke-ya.
 昨日 映画館-に 行く[過去]-[接続助詞] 太郎-が いる[現在] kes-ita
 (昨日、映画館へ行ったんだけど、太郎がいる {わけ・のよ。})

(3) の場合、従来の研究では、前件である「今日、太郎は欠席した」の理由として kes-ita が用いられた後件の「風邪をひいた」と説明していると述べられているが、実際は kes-ita がない文でもそのような解釈は可能である。が、先行研究では、kes-ita の使用の有無による違いについては十分に説明されていない。

その上、(4) のような kes-ita 文は、話し合いの中でたくさん使用されているにも関わ

らず、この種の kes-ita についても殆ど説明されていないか、説明不足である⁵。

以上、先行研究における問題点をまとめると、次のとおりである。

- (5) ①kes-ita II の意味が kes-ita I のそれとはかけ離れており、両者とのつながりが見られない。
- ②先行研究での kes-ita II の意味をもって説明しにくい用例があるなど、kes-ita II の意味解釈についての説明が不十分である。
- ③kes-ita を用いなくても同じ意味解釈ができる用例において kes-ita を使用する理由が明確ではない。

本稿では、従来の研究をふまえつつ、kes-ita I が典型的な「主題—解説」構造を有していることに着目し、その観点から kes-ita II の意味を分析し、kes-ita I と kes-ita II との関連を探る。

補足に、考察対象を kes-ita II に限定する理由は、kes-ita I の働きについては明らかになっている点が多く⁶、基本的には「述語を名詞化し、文全体を名詞文とする」ということが共通の見解であるためである。

以下、2 節では「主題—解説」構造の概観と、kes-ita I の基本的な機能と特徴を検討し、研究方法を設ける。3 節では kes-ita II の使用例をケースごとに分類し、「主題—解説」の観点から分析する。4 節では結論を述べる。

2. 研究方法

2. 1 「主題—解説」構造

「主題」について日本記述 (2009) は、次の (6) のように定義しており、「主題—解説」構造について丹羽 (2000) は、(7) のように述べている。

- (6) 主題とは、その文が何について述べるのかを示すものであり、主題を表す典型的な表現は「は」である。そして、「は」で表される主題は、指示対象の決まった名詞でなければならない。(日本記述 2009:175-190)
- (7) X についてなにか P を述べる形式の文表現において、X を「主題」(「題目」、「トピック」など) と呼び、P の方を「解説」(あるいは「叙述」「評言」「コメント」「説明」「陳述」など) と呼ぶ。(丹羽 2000:100, 西山 2003:359 再引用)

つまり、「は」によって分かれる二項を「X は Y」だとすると、X は主題を、Y は X についての解説を表し、「主題—解説」構造をもっていると考えてよいだろう⁷。

その点で、表現形式に明示的に「X は Y だ」という構造をもっている kes-ita I の文は、

「は」によって二項に分かれ、Y（解説）が X（主題）について何か述べているため、典型的な「主題－解説」構造をもっていると言える。それに対し、kes-ita II の場合は、表現形式に「Y だ」のみが現れ、主題が明示的ではないため、表現形式上は「主題－解説」構造をもっていると言えない。

そのため、本稿では、本来、文レベルで表現形式に明示的に現れる「主題」の定義を、「状況や文脈から導き出される主題⁸」までゆるめ、状況的に「X は Y」または「X なら Y」のように「X について何か Y を述べる」という形の解釈が可能であれば、X は主題であり、「主題－解説」構造をもっていると想定する。

2. 2 kes-ita I の基本的機能と特徴

前述したように、kes-ita I の基本的な機能は「文を名詞文とする」ことである。以下の(8-10)はいずれも kes-ita I の典型的な例文で、名詞文である。

(8) 이 지갑은 타로가 훔친 것이다.

i cikap-un thalo-ka hwumchin kes-ita.

この 財布-は 太郎-が 盗む[過去] kes-ita

(この財布は太郎が盗んだものだ。)

(9) 결혼은 남녀가 법적으로 부부가 되는 것이다.

kyelhon-un namnye-ka pepcek-ulo pwupwu-ka toynun kes-ita.

結婚-は 男女-が 法的-に 夫婦-が なる[現在] kes-ita

(結婚は男女が法的に夫婦になることだ。)

【李 2009】

(10) 주방을 오픈하는 것은 노하우를 다

cwupang-ul ophunhanun kes-un nohawu-lul ta

厨房-を オープンする[現在] kes-は ノウハウを 全部

보여 주는 것이다.

po-ye cwunun kes-ita.

見せてくれる[現在] kes-ita

(厨房をオープンにすることはノウハウを全て見せることだ。)

【李 2009】

例文(8-10)において kes-ita で表されている事態(実線部)は、kes によって名詞化され、文全体が名詞文となっており⁹、「(8) この財布、(9) 結婚、(10) 厨房をオープンにすること」(波線部)について述べている点で、「主題－解説」構造をもっていると言える。そして、その主題は明示的であり、「は」で表されている。

このような kes-ita I の特徴をまとめると次のとおりである。

(11) kes-ita I の特徴 :

- ①先行する事態を名詞化し、文全体を名詞文とする。
- ②「主題－解説」構造をもっており、主題は表現形式に明示的に示されている。
- ③主題についての解説の方を kes-ita で表される事態が担っている。

本稿では、(8-10) のような kes-ita I を kes-ita 文全体のプロトタイプと見て、そこから kes-ita II の意味について次の (12) のポイントを確かめる形で論を進める。

(12) kes-ita II の考察ポイント :

- ①kes-ita II は、統語的な名詞文ではないが、先行する事態をひとかたまりの事態としてまとめる名詞文の形をとっていること。
- ②kes-ita の使用によって、「主題－解説」構造を保つため、欠如している主題を状況や文脈から見つけ出そうとすること。
- ③解説の部分は kes-ita で表される事態が担っており、主題について何を述べるかによって様々な意味解釈が現れること。

本研究の目的は、kes-ita II の意味について上記の (12) を確認することで、kes-ita I と kes-ita II が別のものであるのではなく、kes-ita I の特徴を受け継いでいることを明らかにし、先行研究での諸問題を解決することである。

3. kes-ita II の意味分析

3. 1 ケース 1 : <言い換え>を表すとき

kes-ita は、先行する事態 (X) について「言い換えると」、「まとめると」、「つまり」、それは事態 (Y) だと述べるときによく用いられる。便宜上、この種の kes-ita を<言い換え>の kes-ita と呼ぶ。

次の (13) と (14) は、「いつソウルへ行く？」という問いかけに対する返事である。

(13) 13 일 에 가 . 예 정 보 다 2 일 빠 리 가 는 거 야 .
 13il-ey ka. yeyceng-pota 2il ppalli kanun ke-ya.
 13日-に 行く[現在] 予定-より 2日 早く 行く[現在] kes-ita
 (13日に行く。予定より2日早く行く {わけ・の} だ。) 【李 2009】

(14) 13 일 에 가 . 예 정 보 다 2 일 빠 리 가 .
 13il-ey ka. yeyceng-pota 2il ppalli ka.
 13日-に 行く[現在] 予定-より 2日 早く 行く[現在]
 (13日に行く。予定より2日早く行く。)

例文 (13) と (14) は、kes-ita の使用有無の違いがあるだけで、両方とも「13 日に行く」「予定より 2 日早く行く」という同じ意味を表しているように見える。が、(13) と (14) では、意味解釈の過程において大きな差がある。

(13) は、「13 日に行く。それは予定より 2 日早く行くことだ」のような文が想定でき、「それ」は「13 日に行く」という事態を指している。それに対し、(14) の場合、「13 日に行く。それは予定より 2 日早く行く」のような文は成り立たない。

(13) の場合、話し手は、「予定より 2 日早く行く」ことが「13 日に行く」ことについて述べているということを表すため、kes-ita という表現形式を用いていると考えられる。それを解釈する聞き手は、「予定より 2 日早く行く」という事態が kes-ita によってひとかたまりの事態としてまとめられ「Y だ」という名詞文の形をとっていることから、その文は、何かについて述べているものであると判断し、その何か (X) を探し出すようになる。その結果、(13) で kes-ita が用いられた文の中身は、「それ (X=13 日に行く) は、予定より 2 日早く行くこと (Y) だ」となり、前節で見た kes-ita のプロトタイプと同様、「X は Y だ」の構文において、主題 (X) について何かを述べている点で、「主題—解説」構造をもっていると言える。

このように kes-ita 文は、その文が何かについて述べているものであることを表し、その何か、即ち「主題」を探すことによって「主題—解説」構造を保とうしていると考えられる。それに対し、(14) のように kes-ita が用いられていない文では、kes-ita 文と異なり、主題を探すような働きはない。

もう一つ、(13) と (14) の違いは、kes-ita が用いられた文と、そうでない文とでは、文の性質が異なるという点である。

kes-ita が用いられた (13) の例文は、kes-ita の働きによって主題を探し、それについて述べる際、話し手が推論を行い、「13 日に行く」ことから「予定より 2 日早く行く」という判断を引き出したことを表している。それに対し、kes-ita が用いられていない (14) の文は、先行文である「13 日に行く」と同じ意味の文をただ淡々と述べるだけであって、(13) のような話し手の判断は感じられない。つまり、(14) の文は、「予定より 2 日早く行く」という事態を一つの事実として認識しているのに対し、(13) の文は、当該の事態が話し手の推論によって引き出されたものであることを示しているのである¹⁰。

一方、＜言い換え＞の kes-ita は、主題 (X) について Y と述べる際、X と Y の間では「X は Y と同じだ」という同等関係が成立する。但し、このような関係は kes-ita を用いない場合でも成り立つ。上記の例文 (13) と (14) の場合、両方とも同じ「言い換え」として解釈されることがしばしばある。が、それは、例えば「お腹が痛かった」と「病院へ行った」という二つの事態が与えられたとき、明示的な理由の表現がなくても、人間は前者を後者の理由として解釈できるのと同じく、「13 日に行く」という事態と、「予定より 2 日早く行く」という事態が与えられたときも、人間の自然な認知プロセスによ

って二つの事態を同等の関係として解釈できるためであり、kes-ita の働きによるものではない。

<言い換え>の kes-ita の場合、kes-ita が求めている主題は、先行発話に現われることが多く、比較的に見つけやすい。また、<言い換え>の kes-ita は、kes-ita I のように「X は Y だ」という表現形式に置き換えられるという特徴から、2 節で見た kes-ita のプロトタイプに最も近いものであると考えられる。

以上、<言い換え>を表す kes-ita 文において kes-ita は、「主題」を探すことによって kes-ita 文の「主題－解説」構造を保とうとしており、これは kes-ita 文のプロトタイプである kes-ita I の基本的特徴とつながっている。そして、「言い換え」という意味は、kes-ita の働きではなく、主題を表す事態と解説を担う事態との意味関係によるものであった。

3. 2 ケース 2 : <理由・根拠>を表すとき

ある事態 (X) を認識し、それについてもう一つの事態 (Y) を、X の理由や根拠として述べる場合、kes-ita が用いられることがある。便宜上、この種の kes-ita II を、<理由・根拠>の kes-ita と呼ぶ。

- (15) 오늘 타로는 결석했다. 갑기에 걸린 것이다.
onul thalo-nun kyelsekhayssta. kamki-ey kellin kes-ita.
今日 太郎は 欠席する[過去] 風邪に かかる[過去] kes-ita
(今日、太郎は欠席した。風邪をひいたのだ。)

(15) は、<言い換え>の kes-ita と異なり、「今日、太郎は欠席した。それは風邪をひいたことだ」のような「X は Y だ」という構文は想定しにくい。その代り、「今日、太郎は欠席した。それなら風邪をひいたのだろう」のような文が想定でき、「それ」は「今日、太郎は欠席した」という事態を指している。このような「X なら Y」という構文の場合も、Y は X について何か述べている点で「主題－解説」構造をもっていると言える。つまり、(15) の kes-ita 文は、「今日、太郎は欠席した」という事態について「風邪をひいた」と述べている点で、「主題－解説」構造をもっており、それは、kes-ita によって「風邪をひいた」という事態が、名詞文の形をとっており、表現形式には現われていない主題を求めているためであると考えられる。そして、主題と解説の間では、その意味関係によって「理由」や「根拠」のような因果関係が生じる。

(15) の場合、話し手は、「昨日、太郎が雨に降られるのを見た」などの状況から推論を行い、「今日、太郎は欠席した」ことの理由として「風邪をひいた」という判断を引き出したことを示している。もし話し手が、実際に太郎が風邪をひいている様子を見たり、そのことを聞いたりして、その事態を事実として認識している場合は、kes-ita は用いら

ることができない。その場合は、kes-ita を用いないか、「風邪をひいたからだ」のように理由の表現を明示的に使うか、あるいは「太郎は風邪をひいたそうだ」のような伝聞形式を使うことになる。

次の(16)は、主題となる事態(X)についての理由を述べる時、話し手が解説の部分である事態(Y)を事実として認識している場合であり、kes-ita を用いることができない。

(16) (Bがご飯を食べないのを見て)なぜ食べませんか？

B: a. ?맛이 없는 거예요. (美味しくないんです.)
mas-i epsnun ke-yeyyo.

味-가 ない[現在] kes-ita

b. ?맛이 없어서요. (美味しくないからです.)

mas-i epseseyo.

味-가 ない[理由の接続助詞]-[丁寧体語尾]

(16)のように、話し手自身が食べない理由として「美味しくない」と述べる時は、kes-ita を用いた(16B-a)は不自然で、(16B-b)のみが許される。それは、「美味しくない」という事態は、何らかの推論によって引き出された判断ではなく、話し手自身が事実として認識しているためであると思われる。

それに対し、話し手自身のことではなく、花子さんがご飯を食べないのを見て「なぜ花子さんは食べませんか？」と問いかけられた次の(17)の場合は、kes-ita の使用が自然となる。

(17) A: (花子さんがご飯を食べないのを見て)なぜ花子さんは食べませんか？

B: a. ?맛이 없는 거예요. (美味しくないんです.)
mas-i epsnun ke-yeyyo.

味-가 ない[現在] kes-ita

b. ?맛이 없어서요. (美味しくないからです.)

mas-i epseseyo.

味-가 ない[理由の接続助詞]-[丁寧体語尾]

(17)の場合、花子さんがご飯を食べない理由について「美味しくない」と述べている。が、kes-ita が用いられた(17B-a)は、「花子さんがご飯を食べていない」という主題を探し、それについて「美味しくない」と述べる他、花子さんについての情報、例えば「昔から花子さんは口に合わなかったり美味しくなかったりするものは食べなかった」などの情報から話し手が推論を行い、「美味しくない」と判断したことを表している。それに対し、kes-ita

の事態が何について述べているかという主題を見つけようとする。即ち、「太郎が来た」という主題について、それは「全員集まった」という結果になると述べている点で、「XならY」の構文が想定でき、「主題－解説」構造をもっていると言える。

この種の kes-ita 文は、先行発話から見つけ出した主題について、kes-ita で表された事態が主題の結果として述べられているため、〈結果〉の kes-ita と呼ぶ。無論、「結果」という意味は、kes-ita の働きではなく、主題と解説の間にそのような因果関係が生じるためである。

〈言い換え〉や〈理由・根拠〉の kes-ita と同様、〈結果〉の kes-ita も、kes-ita 文は、話し手が推論を行ったことを示している。(19) の場合、「全員集まった」という事態が事実として存在しているか否かではなく、話し手がこれを事実として認識しているか否かという観点から見て、(19) の kes-ita 文は、事実として認識していることを述べているのではなく、「太郎が来た」という事態から「全員集まった」という事態に至るまで、「P→Q」のような推論を行ったことを表している。それに対し、kes-ita が用いられていない文は、ただ事実として認識している事態を述べるだけで、推論を行い導き出した判断であることは表していない。

以上、3 節の前半では、〈言い換え〉、〈理由・根拠〉、〈結果〉を表すときに用いられた kes-ita について考察したが、いずれも表現形式には明示的に現われていないが、kes-ita で表される事態が名詞文の形となっているが故に、名詞文である kes-ita I と同様、「XはYだ」「XならY」のような「主題－解説」構造を保つための主題を求めている。その働きによって文脈から見つけ出した主題について kes-ita 文が解説を行っている点で「主題－解説」構造をもっており、主題も先行発話にあるなど、比較的に探しやすいという特徴があった。そして、これらの kes-ita II の文には、kes-ita で表される事態が、話し手が推論を行い、導き出した判断であることを示しているという特徴もあった。

また、このような kes-ita II は、主題と解説との意味関係により、同等関係や因果関係などの関係が成り立っており、〈言い換え〉、〈理由・根拠〉、〈結果〉などの意味解釈が現れた。ここで注意すべきことは、kes-ita II そのものが同等や因果関係を表すわけではないということである。なぜなら、前述したように kes-ita を用いなくてもそのような関係は、人間のごく自然な認知プロセスによって解釈できるため、kes-ita II にそのような働きがあるとは考えがたいためである。

以下では、これまでの kes-ita II とは多少違って、主題と解説の間に同等や因果関係のような関連が見られない kes-ita II のケースを考察する。

3. 4 ケース4：〈話し手の感情〉を表すとき

前述したように、kes-ita II の kes-ita は、主題を要求するマーカーとして働いており、

kes-ita で表される事態は、主題について何かを述べている。これまで見てきた<言い換え>、<理由・根拠>、<結果>の kes-ita 文では、kes-ita が要求している主題は、先行発話などに現れ、比較的に探しやすかった。

では、友達との会話の冒頭に、次の例文 (20) が発話されたでしょう。

- (20) 어제 영화관에 갔는데 타로가 있는 거야.
 ecey yenghwakwan-ey kassnuntey thalo-ka issnun ke-ya.
 昨日 映画館-に 行く[過去]-[接続助詞] 太郎が いる[現在] kes-ita
 (昨日、映画館へ行ったんだけど、太郎がいる {わけ・のよ}).

(20) の場合も、kes-ita が使用されているため、表現形式に現れていない主題を探すようになる。が、先行する事態である「昨日、映画館へ行った」を主題とし、それについて「太郎がいた」と述べようとしても、主題と解説の間に同等や因果関係などはもちろん、主題について何を述べているのかも見出すことができない。(20) の場合、「昨日、映画館へ行った」と「太郎がいた」が継起的に起きたことであり、「-nuntey (接続助詞)」によって結びつけられ、「太郎がいた」という事態の背景を述べているため、「昨日、映画館へ行ったら太郎がいた」という事態全体を kes-ita 文だと考えた方が妥当であろう。

(20) は、単純に「昨日、映画館へ行ったら太郎がいた」という出来事を述べるのではなく、「話し手は太郎のことが好きだ」「嫌いだ」「太郎は映画館が苦手だ」など、話し手と太郎についての情報、即ち、状況や文脈が必要であり、その状況や文脈から解釈できる話し手の「不満や意外、嬉しさ」などの感情が表されている。その点から、この種の kes-ita II を<話し手の感情>を表す kes-ita と呼ぶ。

これまで kes-ita II の機能は主題を探すマーカーであると述べてきた。ここでは、説明を分かりやすくするため、「話し手は太郎のことが嫌いだ」という状況を設定し、kes-ita の働きについて分析したい。(20) の kes-ita 文は、「話し手は太郎のことが嫌いだ」という状況から「話し手が嫌だったこと」というものを主題として見つけ出し、「昨日、映画館へ行ったら太郎がいたこと」と述べている。これは「話し手が嫌だったことは、昨日、映画館へ行ったら太郎がいたことだ」のように「XはYだ」という構文が想定でき、XについてYを述べている点で、「主題—解説」構造をもっていると言える。

<話し手の感情>を表す kes-ita も、主題を探し出す働きをするが、前節まで見た<言い換え>、<理由・根拠>、<結果>の kes-ita 文と異なり、その主題は先行発話などから容易に見つけられず、話し手と太郎に関する情報など、特に発話されていない状況や文脈から探すようになる。そして、探した主題と解説の間に決まった特定の関係は存在せず、解釈できる話し手の感情も状況や文脈によって様々である。但し、この場合も kes-ita 文が何について述べるか、即ち、どのような「話し手の感情」について述べるか

は、主題と解説の意味関係によるが、その意味の殆どは kes-ita の働きによって探した主題の内容によって決まることが多い。

例えば、(20) で状況や文脈から「話し手が嫌だったこと」を主題として見つけ出した場合は、「話し手は映画館で太郎と会ったことを嫌だと言っている」という意味になるのに対し、「話し手が嬉しかったこと」を主題として見つけ出した場合は、「話し手は映画館で太郎と会ったことを嬉しいと言っている」という意味になる。

3. 5 ケース 5 : <指示・命令>を表すとき

状況や文脈から主題を探す kes-ita の用例としては、次の (21) のように「指示・命令」を出す場合がある。

(21) (ダンス教室の講師が)

자, 오른발부터 움직이는 거예요.
ca, olunpalpwuthe umcikinun ke-yeyyo.
[感嘆詞] 右足から 動かす[現在] kes-ita

(さあ、右足から動かしてください。)

【李 2011】

(21) は、ダンス教室という状況や文脈から「あなたがこれからやることは、右足から動かすことだ」という解釈ができ、これも kes-ita の働きによって状況や文脈から「あなたがこれからやること」という主題を探し、それについて「右足から動かすこと」と述べている点で、「主題—解説」構造をもっていると言える。

そして、前節の<話し手の感情の表出>の kes-ita と同様、文全体の意味は、状況や文脈から探し出した主題の意味内容によって決まり、「指示」や「命令」の意味を表している。

3. 6 ケース 6 : <当為判断>を表すとき

kes-ita は、聞き手がやるべき行為に対する「当為判断」を表すときに用いられることがある。

(22) (早く寝ない子供に)

어린이는 일찍 자는 거야.
elini-nun ilccik canun ke-ya.
こどもは 早く 寝る[現在] kes-ita

(子供は早く寝るものだ。)

【李 2011】

例文(22)は、発話される状況によって二つの意味解釈が可能である。まず、何の状況が与えられていない場合は、「子供は早く寝る者」という子供についての本質や傾向を述べている。それに対し、早く寝ようとしないう子供に対して発話された場合は、「早く寝なければならない」という「当為判断」を表すことになる。このような二つの意味解釈が可能である理由は、kes-ita 文の「主題－解説」構造における主題と深く関わっている。

前者の場合、既に表現形式に現れている「子供」という主題について「早く寝る者」と述べるもので、文字通りの意味をもち、kes-ita I に当たる。それに対し、後者は「あなたがしなければならないこと」について、「早く寝ることだ」と述べており、それは kes-ita の働きによって状況や文脈から表現形式には現れていない主題を探したという点で、kes-ita II に当たる。

両者はいずれも「主題－解説」構造をもっているが、何について述べるかによって別の意味をもつことになる。これは、本来、(22) は kes-ita I であるが、その意味関係が状況や文脈において適切な意味でない場合、kes-ita の働きによってさらなる主題を探すことになるためであると思われる¹¹⁾。

後半の三つの節で見た、〈話し手の感情の表出〉、〈指示・命令〉、〈当為判断〉を表す kes-ita 文は、状況や文脈から主題を見つけ出し、それについて述べるという点で「主題－解説」構造をもっていると言える。そして、kes-ita 文の意味に大きく貢献するのは状況や文脈から探し出した主題であった。

4. 結論

以上、kes-ita I の意味と特徴を基に、kes-ita II の意味を、「名詞文」と「主題－解説」構造の観点から考察した。

kes-ita II の意味は「主題」と「解説」とに分かれる二項の事態の関係によって、①〈言い換え〉、②〈理由・根拠〉、③〈結果〉、④〈話し手の感情〉、⑤〈指示・命令〉、⑥〈当為判断〉を表すものに分けることができた。そして、kes-ita II の文は、いずれも「主題－解説」構造をもっていることが確認できたが、それは、本来は名詞文として機能している kes-ita の働きによって、表現形式に現れていない「主題」を常に要求しているためであると思われる。つまり、kes-ita II の場合、kes-ita は、当該の文が「主題」を前提条件としていることを示しているマーカーとして働いていると考えられる。

本稿の考察の結果をもって、最初に取り上げた kes-ita 研究の問題点をもう一度検討してみると、次のようになる。

(23) ①【kes-ita I と kes-ita II の意味のつながりについて】 kes-ita II の意味は「主題－

解説」という構造で、kes-ita I とつながり、その基本的特徴を受け継いでいる。

②【従来の研究での説明が不十分である例文について】 kes-ita II の働きが主題を探すためのマーカーであることから、状況や文脈から主題を見つけ出したり、主題探索の過程を繰り返したりすることによって説明できる。

③【kes-ita を用いない文との違いについて】 kes-ita 文は「主題」を見つけ出すためのマーカーとして機能するだけであって、kes-ita を用いなくても同じ意味解釈ができる「言い換え」、「理由・根拠」、「結果」などの関係は、命題内容による人間の自然な認知プロセスから生じる。

以上、「主題—解説」の観点から、kes-ita の意味を考察したが、残された課題も少なくない。

まず、kes-ita I と II を問わず、文末に現れる kes-ita の全体像を明らかにするためには、3.2 で簡単にしか触れていない、ある行為や発話を主題とした kes-ita 文を含め、本稿では扱っていなかった kes-ita 文についての考察が必要であろう。その他、疑問文や否定文に現れる kes-ita や、談話の中での kes-ita の働きなどについても明らかになっていない点が多い。これらは今後の課題としたい。

註

¹ 韓国語の指定詞の ita は、前接する体言が母音で終わっている場合は、i が落ちることがある。

² <韓国語の表記および例文について>

①韓国語のローマ字表記は、Yale 式による。

②kes-ita のバリエーションとして、ke-ya、ke-yeyyo などもある。

③出典が表示されていない例文は、作例である。

④例文において波線は「主題」を、実践は「解説」を表す。

⑤文脈によって複数の日本語訳が可能な場合は、{ } で囲む。

³ Sin (1993:136,153-154) では、「N1 は N2 だ」という典型的な構造で解釈される kes-ita 文の基底構造は、「[_{top} e] [[_{sub} e] ; [kes] ; ita]」であると述べ、(2) の場合、「お父さん (N1) と「帰ってきたこと (N2)」は、それぞれ [+human] と [-human] という相反する値を持っているため、N1 と N2 との間では「N1_i は N2_i だ」という構造が成り立たず、ita は叙述語 (指定詞) としての資格を失うことになる」と述べている。そのため、例文 (2) は、「?お父さんが帰ってきたことだ」という意味ではなく、「お父さんが帰ってきた」という意味を表しており、kes と ita が一つの成分として結合され、様態 (モダリティ) を表していると述べている。

⁴ Yang (2005:55-69) では、kes-ita は ita の意味が認識的モダリティから義務的モダリティへと拡散され、先行する連体修飾節によって kes-ita 文の意味が具体化されない状況下で kes が義務的モダリティを表す ita が結合されたとき、再構造化されると述べている。そして、(2) のような kes-ita

- 文は、「s [NPお父さんが] [VP [v帰ってきた kes-ita]]」のような構造として解釈され、kes と ita が本来の意味を失い、kes-ita という連続体をなしていると述べている。
- ⁵ これについて李 (2009:48-49) では、「話し手の主観的態度を提示する関連づけ」であると述べているが、2つの事態が具体的にどのように関連づけられているかについては、「同等関係」や「因果関係」などが示されていないと述べるだけで、それ以上のことは説明されていない。
- ⁶ kes-ita II の意味については Kim (2000) 、李 (2009) などが詳しい。
- ⁷ 日本記述 (2009:183) では、ある条件によって「は」が対比を表すこともあるが、「は」の基本的な機能を文の主題を表すことだと述べている。
- ⁸ 仁田 (1991:120) では、このような主題を「状況陰題」と名づけ、「題目に当たる部分が文の表現形式の中に何ら存在せず、また、省略によるのでもなく、その文が発せられた場面や文脈といった状況が、当の文の題目として機能しているものを言う」と述べている。
- ⁹ kes-ita II は、さらに kes を実質的な語彙に置き換えられるものと、そうでないものとの二つに分けることができる。前者を「代用」の kes-ita とみなす見解もあるが (Kim 2000 等) 、その判断基準が曖昧である他、代用の可否とは関係なく kes-ita II の文が名詞文であることは変わらない。
- ¹⁰ これは、ある事態が事実として存在するか否かではなく、話し手が当該の事態を事実として認識しているか否か、また、当該の文に話し手の推論が行われたことが表されているか否かという意味での「事実」と「判断」である。
- ¹¹ これと関連して、角田 (2004) では、ノダの思考プロセスが一次的レベルから三次的レベルまでのサイクルをもって実現されると述べている。

参考文献

- 阿部純一他 (1994) 『人間の言語情報処理：言語理解の認知科学』, サイエンス社.
- 李南姫 (2001) 「現代日本語の「のだ」文の総合的な研究」, 大東文化大学大学院 博士論文.
- 李英蘭 (2009) 「韓国語の「geos-ida」文の分析：「geos」の意味拡張を中心に」, 東京大学大学院 修士論文.
- (2011) 「韓国語の「-n kes-ita」文の当為性に関する一考察：「-n pep-ita」との比較を含め」, 日本言語学会第 143 回大会予稿集. 110-115.
- 印省熙 (2006) 「日本語の「のだ」と韓国語の「-ㄴ 것이다」: 会話文の平叙文の場合」, 『朝鮮語研究 3』, くろしお出版, 51-94.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』, 東京大学出版会.
- 尾上圭介 (2004) 『朝倉日本語講座：文法 II』 第 1 章 主題と述語をめぐる文法, 朝倉書店, 1-57.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I：「のだ」の意味と用法』, 和泉書院.
- 崔眞姫 (2005) 「「のだ」の文法化と機能別必須性に関する研究」, 新戸学院大学大学院 博士論文.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』, 「第 2 章 「ハ」と「ガ」(その一) —主題・対象・総記・叙述—」

- 大修館書店, 27-35.
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の連接とモダリティ』, くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスの意味 II』, くろしお出版.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』, ひつじ書房.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.
- 日本記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4』 第 8 部 モダリティ, くろしお出版.
- (2009) 『現代日本語文法 5』 「第 10 部 主題」, くろしお出版, 175-259.
- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』, 和泉書院.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』, くろしお出版.
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』, くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版.
- 幸松英恵 (2006) 「「のだ」と‘것이다’の日韓対照研究: 翻訳比較を通して見る共通点と相違点」『日本語と朝鮮語の対照研究』, 東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば—進化認知科学的展開」研究報告書, 107-158.
- 吉川武時 (編) (2003) 『形式名詞がこれでわかる』, ひつじ書房.
- M.A.K. Halliday and Ruqaiya Hasan (1976) *Cohesion in English*, Longman. (安藤貞雄他 (訳) 『テキストはどのように構成されるか: 言語の結束性』, ひつじ書房, 1997)
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition* (2nd ed.), Blackwell, Oxford. (内田聖二他 (訳) 『関連性理論: 伝達と認知』 第 2 版, 研究社, 1999)
- Kim Ci-un (1998) 『우리말 양태용언 구문 연구』, 韓国文化社.
- Kim, Ki-hyek (2000) 「지정의 문법 범주」, 『이중언어학』 第 17 号, 77-95.
- Kim, Sang-ki (1994) 「관형형어미+kes-ita 구문 연구」, 東亜大学大学院 修士論文.
- Nam, Ki-sim (1991) 「불완전명사‘것’의 쓰임」, 『국어의 이해와 인식』, 77-88.
- (2001) 『현대국어통사론』, 太学社.
- Pak, Cay-yen (2006) 『한국어 양태 어미 연구』, 太学社.
- Sin, Sen-kyeng (1993) 「‘것이다’구문에 관하여」, 『국어학』 Vol.23 No.1, 119-158.
- Yang, Tay-yeng (2005) 「‘것이다’構文 研究」, 韓國外国語大学大学院 修士論文.

